

議論Rの構造*

今井知正

わたくしは昨年の本紀要に、「『テアイトス』第二部第五議論の帰趨」という論文を発表した⁽¹⁾。この論文は一昨年の九月に開催された「ギリシャ哲学セミナー」という学会で発表した原稿と修正をほどこしたものである⁽²⁾。この学会での発表後の質疑応答の中で、野村光義氏はわたくしの発表の主な論点の一つについて質問された。だが、時間の制約とともに、口頭での質疑応答という制約もあって、わたくしは氏の質問の内容を十分に把握することができず、納得のいく答えはとりあえず述べることができなかった。それには、次のような事情があったからである。すなわち、『テアイトス』第二部では、知識(episteme)の第二定義⁽³⁾の吟味に先立って、「偽なる思いはない」という虚偽論のアポリアをめぐる議論が第一議論から第五議論まで次々と展開される。そして第五議論の終盤に至り、この虚偽論のアポリアの議論が循環し、無限に後退することが示されて、議論は全体として否定的結末に終ることになる。ここで、「無限後退」に陥るこの虚偽論のアポリアの議論を「議論R」と名づけることにすれば⁽⁴⁾、わたくしの発表の目的は、この議論Rを取り上げ、その論理的な構造と哲学的な意味の二つの論点を明らかにすることであった。これに対して、野村氏の質問は前者の論点、つまり、議論Rの論理的な構造に関するものであり、具体的には、それに関するわたくしの理解が違っているのではないかという反論を意図し

たものであった。したがって、氏の質問の内容を十分に把握して、それに答えるためには、「無限後退」という、この議論Rの論理的な構造についての氏の説明を理解しなければならず、そのためには口頭の議論だけでは十分ではなく、それにはどうしても限界があったということである。このような事情から、学会の終了後、野村氏はただちに質問の内容を「偽なる思いと高階の鳥小屋」という論文^⑤にまとめられ、それをわたくしに送ってくださった。そこで、わたくしは氏を大学院の授業に招き、院生をはじめ、その他の方々とともに氏の論文を検討し、その説明を伺う機会をもったのである。その結果、議論Rの論理的な構造についての氏の説明は『テアイテトス』のテキストによく合致していて、しかも自然であり、説得力に富んだものであることが明らかとなった。わたくしの知るかぎり、氏の説明は議論Rの構造についてもっとも透徹した理解を示していると言ってよいものである。

そこで、以下では、まず、論文に記されている氏の説明を、紹介もかねて、順に追跡し、次に、そこに含まれているとみられる問題点を二つ挙げて、論じ、最後に、議論R、さらには第五議論全体の論理的な構造について一度考察して、それがいかなるものであるかということ明らかにすることにしよう。

一

議論Rの論理的な構造についての氏の説明の要点は次のような認識、すなわち、第五議論には、議論Rと同じく、そして議論Rの前に、「鳥小屋の比喩」^⑥に基づいて論じられる最初のアポリアの議論があり、この議論が議論Rないしはその各段階の範型となって、循環が起こり、無限後退が生じてくるという認識にある。そこで、氏の論文は次の文章から始まることになる。

「帰趨」論文に対するわたくしの批判のポイントは「2つ目以降の鳥小屋の議論（議論R）を第1の鳥小屋

の議論とパラレルになるように定式化すると、「帰趨」論文解釈のようにはならない」ということである。……
 わたくしに言わせれば、議論 R の再構成にとってその「議論 R の「第一段階」、「第二段階」等々の」前に参考
 にすべき段階「すなわち、「第1の鳥小屋の議論」があるということである(7)。

上の引用文中の第一文、つまり、氏の論文の冒頭の一文の末尾には、注の「3」が付けられており、そこには、氏の「批判のポイント」が「アブストラクト」として要約されている。少し長くなるが、理解を容易なものとするために、それを以下に記すことにする。

アブストラクト…説明者は、偽なる思い、つまり12と11の思い違いを第1の鳥小屋の「11の知」と「12の知」の間の取り違えによって説明する、すなわち「aは「12の知」を捕らえるところを、誤って「11の知」を捕らえる」ことによって説明する。それとパラレルに、議論 R では説明者は、知と不知の思い違いを第2の鳥小屋の「知の知」と「不知の知」の間の取り違えによって説明する、すなわち「aは「知の知」を捕らえるところを「不知の知」を捕らえる」ことによって説明する。よって、説明者は、命題 Ba (11a \parallel 11e) を帰属文として活かしているのであって、「命題 Ba (11a \parallel 11e) を否定して、第一段階の関わる争点を克服し、それを消去する(「帰趨」論文、p. 8, ll. 24-25)」のではない。また、第1の鳥小屋に不知が導入されると、説明者は12と11の思い違いを第1の鳥小屋の「12の知」と「11の不知」の間の取り違えによって説明する、すなわち「aは「12の知」を捕らえるところを、誤って「11の不知」を捕らえる」ことによって説明する。それとパラレルに、議論 R では第2の鳥小屋に不知が導入されると、説明者は、知と不知の思い違いを第2の鳥小屋の「知の知」と「不知の不知」の間の取り違えによって説明する、すなわち「aは「知の知」を捕らえるところを、誤って

「不知の不知」を捕らえる」ことによって説明する⁽⁸⁾。

この「アブストラクト」は都合五つの文からなっているが、一読して明らかのように、第三文を中間にはさんで、前半の第一文と第二文、後半の第四文と第五文が、それぞれ前者が後者の範型となることによって、「パラレル」で、互いに対応した関係に立っている。この整然とした形で描かれている「アブストラクト」は氏の説明の全体的な見取図と言うべきものであり、これを参考にしながら、われわれは氏の説明を以下に順に追っていくことにしよう。

周知のように、第五議論においては、「5 + 7 = 11と思う」という計算間違いから帰結する「12 = 11と思う」(cf.196b5) あるいは「11 = 12と思う」(cf.196b4) という偽なる思いが取り上げられ、これをめぐる弁証問答の議論が「鳥小屋の比喩」に基づいて、説明者と反論者との間でまず展開される。これが本節のはじめに述べた「最初のアポリアの議論」であり、氏の言う「第1の鳥小屋の議論」である。氏の説明はこの議論を、(ア) から (キ) までの七つの命題を挙げることによって、分節化し、再構成しようとする。

はじめに、説明者は、あるひと a が「11 = 12と思う」(Ba(11 = 12)) という偽なる思い、つまり「11と12の思い違い」⁽⁹⁾ という a の偽なる思いを説明するために、第一の鳥小屋を措定し、その中に「すべての自然数」(cf.196b3) の知を導入する。

(ア) 説明者は Ba(11 = 12) を帰属文として説明しようとして、鳥小屋に「11の知 (11e)」と「12の知 (12e)」等の知を導入する⁽¹⁰⁾。

次に、説明者はこの「11と12の思い違い」という a の偽なる思いを鳥小屋の中の二つの知の間の取り違えとして、次のように説明する。

(イ) a は12の知を捕らえるところを、誤って11の知を捕らえてしまっている⁽¹¹⁾。

(イ) は「アブストラクト」の第一文の中でほぼこのままの形で述べられていたものである。続いて、説明者のこの説明に対して、注釈が付けられ、被説明項としての「思い違い」の対象と説明項としての「取り違え」の対象の二つの間の関係について、次のように言われる。

後のパラレルな議論のために強調しておく、ここでは「11と12の思い違い」を鳥小屋内の「11の知と12の知の間の取り違え」として説明しているのである。実際の世界(思いの中の世界?)よりも鳥小屋「モデル」のほうが、「知」がひとつ多くついていることを確認しておきたい⁽¹²⁾。

この「確認」が行われると、今度は、説明者のこの説明に対する反論が反論者の方から提出される。すなわち、a の「11と12の思い違い」が「11の知と12の知の間の取り違え」として、言い換えれば、「12の知を捕らえるところを、誤って11の知を捕らえ」ることとして説明されるとするならば、

(ウ) a はまさに11の知によって11を知らないことになってしまう⁽¹³⁾。

という不合理な事態が帰結してくる、と¹⁴⁾。そこで、説明者は¹⁵⁾、この反論を回避するために、鳥小屋の中に「知」とともに「不知」を導入する「妙案」を提示し、aの「11と12の思い違い」を、(イ)に代えて、これらの知と不知の間の取り違えとして、次のように説明する。

(エ) aは12の知を捕らえるところを、誤って11の不知を捕らえてしまっている。¹⁶⁾

そしてこの「妙案」に基づいた「真なる思い」と「偽なる思い」の二つの定式化がそれぞれ述べられる。

(オ) 「真なることを思うこと」= det. 「知を捕らえること」

「偽なることを思うこと」= det. 「不知を捕らえること」¹⁷⁾

続いて、この「妙案」が検討され、「11と12の思い違い」という、自らの偽なる思いを対象とするaの2階の思いが定式化される。

(カ) aは、自分が偽なることを思っている (doxazein) と思っていることになる (hegēsetai) のではなく、あたかも知っているかの状態で、真なることを思っていると思っていることになる (oīsetai)。 (しかし実際には、aは偽なることを思っている。)¹⁸⁾

これは、言い換えれば、aは自らの計算間違いには気づかず、自文脈に身を置いており、したがって、自らの偽

なる思いについての 2 階の偽なる思いをもってることになるといふことである。そしてこの (カ) に (オ) の二つの定式化が適用されて、次の (キ) が得られる。

- (キ) a は知を捕らえている (tēhēreutikōs echein) と思っていることになる (oiēsetai)。 (しかし実際には、a は不知を捕らえている。)⁽¹⁹⁾

以上が (ア) から (キ) までの七命題である。これより、「5+7=11と思う」との計算間違いから生じる「11と12の思い違い」という a の偽なる思いは第一の鳥小屋の中の「12の知と11の知の間の取り違い」として、否、「12の知と11の不知の間の取り違い」として説明され、こうして「第一の鳥小屋の議論」、つまり、議論 R の前になされる「最初のアポリアの議論」が再構成されたことになる。だが、a の「11と12の思い違い」という偽なる思いは説明されたとしても、(カ)(キ) の二命題が示すように、この説明には「11と12の思い違い」とは別の偽なる思いが新たに含まれており、よって、今度はこの偽なる思いが争点として取り上げられ、これをめぐる新たな弁証問答の議論が説明者と反論者との間で闘わされることになる。これが議論 R の始まり、すなわち、虚偽論のアポリアの議論の「無限後退」の始まりである。では、次に、この議論 R に関する氏の説明を追ってみることにしよう。

議論 R は、テキストの上では、第五議論の「終盤の部分」(199c7-200c7) の「後半」(200a11-c7) から開始される⁽²⁰⁾。最初に、上の (キ) における「知と不知の思い違い」⁽²¹⁾ という a の偽なる思いが取り上げられ、まず、その第一段階 (200b1-5) として、第一議論と同様の反論が反論者 (cf. 200a12) によって展開される。すなわち、

上記 (キ) の「知」と「不知」のそれぞれに「それを知っているかそれを知らないか」という排中律 (「第

一議論の(A)(C)が適用され、都合4つのパラドクシカルな選択肢が提示される(「第一段階」)^{22c)}。

そしてこれら四つの選択肢はすべて不成立で、「ダメ」²³⁾であることから、説明者はこの「知と不知の思い違い」というaの偽なる思いを説明するために、第二の鳥小屋を措定し、この中に「知の知」や「不知の知」を導入することになる。これが議論Rの第二段階であり、先の「第一の鳥小屋の議論」と「パラレル」な議論、言うなれば「第二の鳥小屋の議論」が展開される段階である。そこで、この第二段階は、「第一の鳥小屋の議論」と同様、(ア)から(キ)までの七命題によって²⁴⁾、以下のように再構成されることになる。すなわち、はじめに、

(ア) 説明者はBa(11a||11e)を説明しようとして、第二の鳥小屋に「11の不知の知(11ae)」と「11の知の知(11ee)」等の2階の知を導入する²⁵⁾。

次に、説明者は「11の知と11の不知の思い違い」というaの偽なる思いを第二の鳥小屋の中の「11の知の知と11の不知の知の間の取り違い」として、次のように説明する。

(イ) aは11の知の知を捕らえるところを、誤って11の不知の知を捕らえてしまっている²⁶⁾。

そして(イ)の場合と同じく、ここで、説明者のこの説明に対して、注釈が付けられ、被説明項としての「思い違い」の対象と説明項としての「取り違い」の対象の二つの間の関係について、短い「注意」が述べられる。

前のパラレルな箇所同様、鳥小屋内のほうが、「知」がひとつ多くつくことに注意したい⁽²⁷⁾。

この注釈の後に、今度は、この説明に対する反論が反論者の方から提出される。すなわち、aの「11の知と11の不知の思い違い」が「11の知の知と11の不知の知の間の取り違い」として、言い換えれば、「11の知の知を捕らえるところを、誤って11の不知の知を捕らえ」ることとして説明されるとするならば、

(ウ) aはまさに11の不知の知によって11の不知を知らないことになってしまふ⁽²⁸⁾。

という不合理な事態が帰結してくる、と⁽²⁹⁾。そこで、この反論を回避するために、説明者は第二の鳥小屋の中に「知の知」や「不知の知」とともに「不知の不知」を措定する「妙案」を提示し、aの「11の知と11の不知の思い違い」を、(イ)に代えて、「11の知の知と11の不知の不知の間の取り違い」として、次のように説明する。

(エ) aは11の知の知を捕らえるところを、誤って11の不知の不知を捕らえてしまっている⁽³⁰⁾。

続いて、この「妙案」が検討され、「11の知と11の不知の思い違い」という、自らの2階の偽なる思いを対象とするaの3階の偽なる思いが定式化される。

(カ) aは、〈自分が真なることを思っていると自分が正しくも思っている〉と思っている。しかし、実際には、〈aが真なることを思っていると自分が正しくも思っている〉というのは偽である。

または、

a は〈自分が知を捕らえていると自分が正しくも思っている〉と思っている。しかし実際には、〈a は自分が知を捕らえていると正しくも思っている〉というのは偽である⁽³¹⁾。

そして(カ)に(オ)の二つの定式化が適用されて、(キ)が得られる。

(キ) a は、自分が知の知を捕らえていると思っている。しかし、実際には、a は知の不知を捕らえている⁽³²⁾。

以上が(オ)を含めた(ア)から(キ)までの七命題である。これより、「11の知と11の不知の思い違い」という、a の偽なる思いは第二の鳥小屋の中の「11の知の知と11の不知の知の間の取り違い」として、否、「11の知の知と11の不知の不知の間の取り違い」として説明され、こうして「第2の鳥小屋の議論」と言うべき議論Rの第二段階が再構成されたことになる。だが、「11の知と11の不知の思い違い」という、a の偽なる思いは説明されたとしても、(カ)(キ)の二命題が示すように、この説明には「11の知と11の不知の思い違い」とは別の偽なる思いが新たに含まれており、したがって、今度はこの偽なる思いが争点として取り出され、これをめぐる新たな弁証問答の議論が説明者と反論者との間で展開されることになる。これが議論Rの第三段階であり、前の「第1の鳥小屋の議論」や「第2の鳥小屋の議論」と「パラレル」な議論、言うなれば「第3の鳥小屋の議論」が展開される段階である⁽³³⁾。そこで、この第三段階は、前の議論と同様、上の(キ)に含まれる「11の知」と「11の不知」の思い違い(Ba(ea=ee))を説明するために⁽³⁴⁾、説明者が第三の鳥小屋を措定し、その中に3階の知を導入するところから、その再構成が始められることになる。すなわち、はじめに、

(ア) 説明者は $Ba(ea \equiv ea)$ を説明しようとして、第3の鳥小屋に「知の不知の知 (ea)」と「知の知の知 (eee)」等の3階の知を導入する⁽³⁶⁾。

次に、説明者はこの「知の知」と「知の不知」の思い違い」という a の偽なる思いを第三の鳥小屋の中の「知の知の知」と「知の不知の知」の間の取り違え」として、次のように説明する。

(イ) a は「知の知の知 (eee)」を捕らえるところを、誤って「知の不知の知 (eee)」を捕らえてしまっている⁽³⁶⁾。

議論 R の第三段階は、実は、ここで再構成が終っており、これ以降は「以下、無限後退となる」⁽³⁷⁾と記されて、(ウ)等の命題が挙げられることはない。これはすでに明らかだからであるが、その代わりに、「念のため」⁽³⁸⁾と行って、議論 R の第 n 段階が以下に掲げる四命題によって再構成され、言うなれば「第 n 番目の鳥小屋の議論」の骨格が説明されている。

はじめに、議論 R の第 n 段階の争点を導出するために、 a の n 階の偽なる思いが定式化される。

(4_{F1}) a は、〈自分が真なることを思っていると自分が正しくも思っていると……と自分が正しくも思っている〉とと思っている。しかし実際には、〈 a が真なることを思っていると自分が正しくも思っていると……と自分が正しくも思っている〉というのは偽である⁽³⁹⁾。

そして(4_{F1})に(オ)の二つの定式化が適用されて、(4_{F1})が得られる。

(キ) a は、自分が「知の……の知の知 (a:ēē)」を捕らえていると思っ
ている。しかし、実際には a は「知の……の知の不知 (a:ēē)」を捕らえている⁽⁴⁰⁾。

これより、議論 R の第 n 段階の争点が「知の……の知の知」と「知の……の知の不知」の思い違い」という a の偽なる思いであることが導かれる。そこで、説明者は第 n 番目の鳥小屋を措定し、その中に「知の……の知の知の知」や「知の……の知の不知の知」等の n 階の知を導入し、この a の偽なる思いをこれら n 階の知の間の取り違えとして、次のように説明する。すなわち、

(ク) 説明者は a の「知の……の知の知 (a:ēē)」と「知の……の知の不知 (a:ēā)」の思い違い」を「知の……の知の知の知 (a:ēēē)」と「知の……の知の不知の知 (a:ēēē)」の間の取り違え」によって説明する⁽⁴¹⁾。

そしてこの説明に対して提出される反論者の反論を回避するために、説明者は第 n 番目の鳥小屋の中に n 階の知とともに n 階の不知を措定する「妙案」を提示し、上の a の偽なる思いを、(ク) に代えて、次のように説明する。

(ケ) 説明者は a の「知の……の知の知 (a:ēē)」と「知の……の知の不知 (a:ēā)」の思い違い」を「知の……の知の知の知 (a:ēēē)」と「知の……の知の不知の不知 (a:ēāā)」の間の取り違え」によって説明する⁽⁴²⁾。

以上が (4) (5) (6) (7) (8) の四命題である。これより、「知の……の知の知」と「知の……の知の不知」の思い違いという、a の n 階の偽なる思いは第 n 番目の鳥小屋の中の「知の……の知の知の知」と「知の……の知の不知の知」という、n 階の知の間の取り違い」として、否、「知の……の知の知の知」と「知の……の知の不知の不知」という、n 階の知と不知の間の取り違い」として説明され、こうして「第 n 番目の鳥小屋の議論」と言わば議論 R の第 n 段階がおおよそ再構成されたことになる。そして最後に、全体としての議論 R の論理的な構造についての氏の解釈が述べられる。

わたくしの解釈によれば、議論 R の論理的構造は以下のようになる…

鳥小屋内の「知」と「知」、さらに「知」と「不知」の間の取り違いによって、偽なることを思うひと a の 1 階の思い違いが説明されたとたん、新たな 2 階の思い違いがあることが同意され、第 2 の鳥小屋を措定することが必要になる。しかし、さらに高階の思い違いは尽きることなく存在するので、尽きることなく同じように高階の鳥小屋を措定することが余儀なくされる⁽⁴³⁾。

さらに議論 R の成立にとって、その決定的な要因となり、またその哲学的な意味とも考えられる「不知」について言及がなされ、氏の解釈においては、それは a の「1 階の計算間違いの「不知」⁽⁴⁴⁾であること、そしてこの最初の「不知」が終始、自文脈に身を置く a の「尽きることない新たな「不知」⁽⁴⁵⁾の源泉であり、その始まりであることが主張される。

以上が「第 1 の鳥小屋の議論」を含む議論 R の論理的な構造についての氏の説明である。

われわれは前節において議論Rの論理的な構造についての氏の説明を順に追跡してきた。これより明らかになったことは、先にも述べたように、氏の説明は『テアイトス』のテキストによく合致していて、自然であり、十分に説得力のあるものだということである。これは、氏の説明が議論Rの各段階の「パラレル」な性格に注目し、それが各段階のどこに、またどのような形で現われてくるのかという点を確に把握したことによる。この意味で、前節でも引用したように、「2つ目以降の鳥小屋の議論（議論R）「の各段階」を第1の鳥小屋の議論とパラレルになるように定式化する」⁴⁶ ことと、「思い違い」の対象と「取り違え」の対象の二つの間の関係について、「実際の世界（思いの中の世界？）よりも鳥小屋「モデル」のほうが、「知」がひとつ多くついていることを確認」⁴⁷ することは氏の説明の要点を構成する二つの要素と言ってよい⁴⁸。だが、このような見事な着想をもつとはいえず、氏の説明にも問題点がまったくないかと言えば、そうではない。ここでは、そこに含まれているとみられる問題点を二つ挙げ、それらについて論じることにした。

まず、一つの問題点は議論Rの第二段階以降に関するもので、具体的には、これらの段階の再構成に登場する幾つかの命題の定式化に関わるものである。いま、一例として、議論Rの第二段階を取り上げてみよう。前節で見たように、議論Rの第二段階は「第1の鳥小屋の議論」に対して「第2の鳥小屋の議論」と言うべきもので、説明者は「IIの知とIIの不知の思い違い」(Ba(IIa = IIa)) という a の偽なる思いを第二の鳥小屋の中の「IIの知の知(IIa)とIIの不知の知(IIa)の間の取り違え」として説明しようとする議論である。このとき、これを説明する命題(イ)は前節では次のように定式化されていた。

(イ) a は 11 の知の知を捕らえるところを、誤って 11 の知の知を捕らえてしまっている。

しかし、この定式化は不合理で、誤っていると云わざるを得ない。なぜなら、「11 の知と 11 の不知の思い違い」という a の偽なる思いとは、「第 1 の鳥小屋の議論」の再構成の最後に登場した命題 (キ) が述べているように⁽⁴⁹⁾、11 の不知を捕らえているにもかかわらず⁽⁵⁰⁾、自らは 11 の知を捕らえていると思っっているという、a の偽なる思いを表現しており、したがって、これを「11 の知の知と 11 の不知の知の間の取り違い」として説明しようとするならば、(イ) は以下のように定式化されなければならないからである。

(イ) a は 11 の不知の知を捕らえるところを、誤って 11 の知の知を捕らえてしまっている。

つまり、「11 の知の知」と「11 の不知の知」という、「取り違い」の対象となる二つの知が氏の定式化においては逆に捉えられており、これらの二つの知は交換されなければならないのである。実際、もしも a が、氏の定式化にあるように、「11 の不知の知を捕らえて」いるとするならば、これは a が 11 の不知を捕らえているという事態に「対応」しているから、a は「誤って」ではなく、「正しく 11 の不知の知を捕らえて」いるということになるであろう。また同じく、もしも a が「11 の不知の知を捕らえて」いるとするならば、a は自分が 11 の不知を捕らえているということを知っていることになり、このことは自らのもつ偽なる思いに対立するとともに、次の命題が a について成り立つことになるであろう。

(ウ*) a はまさに 11 の不知の知によって 11 の不知を知っていることになってしまう。

すると、(ウ*)は、aが自文脈に身を置いていることに矛盾するが、さらに、(ア)(イ)という、説明者の説明に対して提出される反論者の反論とも矛盾することになる。というのも、その反論は、前節で見たように、

(ウ) aはまさに11の不知の知によって11の不知を知らないことになってしまう。

というものであったからである。これは、(イ)に続く(ウ)もこのままでは成り立たず、(イ)の再定式化にしたがって、(ウ)の再定式化も必要であることを示している。そこで、(ウ)は、上の「11の不知の知」を「11の知の知」に変換し、さらに、それに応じて、「11の不知」を「11の知」に変換することにより、正しくは以下のように定式化されなければならない。

(ウ) aはまさに11の知の知によって11の知を知らないことになってしまう⁽⁵¹⁾。

さらに、(イ)(ウ)の再定式化にしたがい、これらに続く(エ)についても、その再定式化が必要であることは明らかである。(ウ)の反論を回避すべく、テアイテトスの「妙案」を表現する(エ)は、したがって、正しくは以下のように定式化されなければならない。

(エ) aは11の不知の知を捕らえるところを、誤って11の知の不知を捕らえてしまっている。

これは、説明者が「11の知と11の不知の思い違い」というaの偽なる思いを、前節におけるように、「11の知の知

(I1ae) と I1 の不知の不知 (I1aa) の間の取り違え」としてではなく、「I1 の不知の不知 (I1ea) と I1 の不知の不知 (I1ae) の間の取り違え」として説明することを意味している。

さて、いままで見てきたように、議論 R の第二段階においては、その再構成に登場する (イ)(ウ)(エ) の三つの命題の定式化が問題であり、これらの三命題はそれぞれ上に述べた仕方でも同様に定式化されなければならないことは明らかである。この点は議論 R の第三段階以降においても同様であり、これらの三命題に対応する各段階の三命題はそれぞれ上に述べた仕方に対応した仕方でも定式化されなければならないのである。一般に、議論 R の第 n 段階は前節において (ヤ) (イ) (サ) (ニ) (ク) (ケ) の四命題によって再構成されたが、これらの中では、(ク) が、たとえば、第二段階で言えば、(イ) に、(ケ) が、(エ) に関係している。この中、少なくとも (ケ) の定式化は誤っていると言わざるを得ず、これは、(エ) の再定式化に対応して、正しくは以下のように定式化されなければならない。

(ケ) 説明者は a の「知の……の知の知 (e:ee)」と「知の……の知の不知 (e:ea)」の思い違いを「知の……の知の不知 (e:ee)」と「知の……の知の不知の知 (e:ee)」の間の取り違え」によって説明する⁽⁵²⁾。

また (ク) は、それ自体としては、その定式化が誤っているとは言えないが、そこで考えられている説明者の説明が (イ) に対応するものであるとするならば⁽⁵³⁾、(イ) において「取り違え」の対象となる二つの 2 階の知が交換されなければならないように、(ク) に関しても、(イ) に対応する命題においては「取り違え」の対象となる二つの n 階の知が交換されなければならないということは明らかである。以上が最初の問題点に関わる事柄である。

次に、もう一つの問題点を挙げるならば、それは同じく議論Rの第二段階以降に関するもので、これらの段階の再構成に登場する七命題の相互の連関と全体の統一性に関わるものである。というのは、いましがた指摘したように、七命題の中の三命題は再定式化が必要であるが、それにもかかわらず、氏の説明が全体として説得力のある正しいものであるのは、他の四命題がこれら三命題から独立に正しく定式化されているからであり、これは、両者の間に再構成の上である切れ目のあることを逆に示しているからである。いま、一例として、議論Rの第二段階を再び取り上げてみよう。議論Rの第二段階は(オ)を含めた(ア)から(キ)までの七命題によって再構成されるが、これらの中から(イ)(ウ)(エ)の三命題を除いた四命題、すなわち、(ア)(オ)(カ)(キ)の四命題は正しく定式化されている。これらの四命題の中、(イ)(ウ)(エ)の三命題、さらにいえば、(イ)(エ)の二命題に直接関わりのあるのは(カ)(キ)の二命題であり、この中、(キ)は(イ)(エ)内の表現「誤って」の次に記されている2階の知と不知とから形成される⁽⁵⁴⁾。先に本節で正しく定式化された(イ)(エ)では、それらはそれぞれ「11の知の知」と「11の知の不知」であるから、(キ)は、前節でも見たように、

(キ) aは、自分が11の知の知を捕らえていると思っ⁽⁵⁵⁾ている。

と定式化される。ところが、前節で定式化された(イ)(エ)では、それらはそれぞれ「11の不知の知」と「11の不知の不知」であるから、もしも(キ)がこれらの知と不知とから形成されていたとするならば、それは次のように定式化されていたことであろう。

(キ) a は、自分が 11 の不知の知を捕らえていると思っている。しかし、実際には、a は 11 の不知の不知を捕らえている。

しかし、(キ) がこのようには定式化されず、まさに正しく定式化されたのは、(イ)(エ) の二命題と(キ) の間の直接的な連関には目が向けられず、自文脈に身を置く a の偽なる思い、ここでは、その 3 階の偽なる思いが(イ)(エ)とは独立に取り上げられて、定式化され、この定式化に基づいて、(オ)を通して、(キ) が定式化されたからである。そしてこの定式化が(カ)であることは言うまでもないことであろう。したがって、(イ)(エ)の二命題と(オ)(カ)(キ)の三命題の間には定式化の上での明確な切れ目があり、相互の連関が考慮されずに、五命題が二分されているようにみえるのである。これは、全体として言えば、(イ)(ウ)(エ)の三命題と(ア)(オ)(カ)(キ)の四命題との間には切れ目があり⁽⁵⁶⁾、相互の連関が考慮されずに、七命題が二分されているようにみえるということである。そこで、この事態を改めて、全体の統一性を回復するためには、(イ)(エ)の二命題と(キ)の間の密接な連関に着目し、この連関から得られた(キ)の定式化が(イ)(エ)から独立に得られたそれと一致しているかどうかを確かめてみればよい。そしてもしも両者が一致していなければ、いずれか一方の定式化がどこかで誤っているということになる。前節に登場した(キ)の定式化とこのパラグラフで記した(キ)の二番目の定式化がちょうどこの例に当たる。これに対して、前節に登場した(キ)の定式化とこのパラグラフで記した(キ)の最初の定式化とは一致しており、こうして七命題は、その再構成の上での切れ目がなく、二分されずに、全体の統一性が確保されていると言うことができるのである。

さて、いままで論じてきたように、議論 R の第二段階においては、その再構成に登場する七命題は全体として二分され、相互の連関が考慮されずに、統一性を欠いているようにみえる。この点は議論 R の第三段階以降において

も同様であり、第二段階の二つの命題群、つまり、(イ)(ウ)(エ)の三命題と(ア)(オ)(カ)(キ)の四命題に対応する各段階の二つの命題群の間には定式化の上での切れ目があり、七命題は全体としての統一性を欠いているようにみえるのである。一般に、議論Rの第n段階は、前節で見たように、 $(\mathcal{A}_{n-1})(\mathcal{B}_{n-1})(\mathcal{C}_{n-1})(\mathcal{D}_{n-1})$ の四命題によって再構成されるが、これらの中、 (\mathcal{A}_{n-1}) は、第二段階でいえば、(カ)に、 (\mathcal{B}_{n-1}) は(キ)にそれぞれ対応し、(ク)は(イ)に、(ケ)は(エ)にそれぞれ関係している。したがって、四命題の中の前二命題と後の二命題との間には定式化の上での切れ目があり、相互の連関が考慮されずに、全体が二分されているようにみえるのである。そこで、この事態を改めて、全体の統一性を回復するためには、(ク)(ケ)の二命題と一階上の命題、すなわち、第n+1階の命題 (\mathcal{A}_n) との間に成り立つ直接的な連関に着目し、この連関から得られた (\mathcal{A}_n) の定式化が(ク)(ケ)の二命題から独立に得られたそれと一致しているかどうかを確かめてみればよい。これは先に述べた第二段階の(キ)の定式化に関する確かめ方、さらにまたこの(キ)に対応する第三段階以降の命題の定式化に関する確かめ方と基本的に同じであるが、議論Rの第n段階においては、その再構成の仕方が変化しているために、二つの階に跨る形になっているものである。以上が二番目の問題点に関わる事柄である。

三

われわれはこれまで議論Rの論理的な構造についての氏の説明を追跡し、そこに含まれているとみられる問題点について論じてきた。残るところは、これらの論述を踏まえて、議論Rの論理的な構造について改めて考察し、それがどのようなものであるかを明らかにすることである。その際、はじめに方法論として押さえておくべきことが二つあるように思われる。一つは、第一節の冒頭で述べた氏の説明の要点となる氏の認識、つまり、「第1の鳥小屋の議論」が議論Rないしはその各段階の範型となっているという認識である。これは、議論Rの論理的な構造に

について考察する際には、「第1の鳥小屋の議論」をその範型とし、それを参考にして、行うべきだということを意味する。もう一つは、議論 R を含む第五議論全体のもつ議論構造、つまり、「偽なる思いはない」という虚偽論のアポリアをめぐる、他文脈に身を置く説明者と自文脈に身を置く反論者が交互に自らの主張を闘わせるという、弁証問答の議論構造である⁽⁵⁹⁾。これは、議論 R の論理的な構造について考察する際には、この弁証問答の議論構造に注目し、それを明確にして、行うべきだということを意味する。そこで、われわれはこれら二つの方法論上の指針を念頭に置きながら、議論 R の論理的な構造について考察することにしよう。もっとも、これら二つの方法論上の指針を念頭に置くためには、その前提として、「第1の鳥小屋の議論」つまり、議論 R の範型である「第1の鳥小屋の議論」の論理的な構造を、その弁証問答の議論構造とともに把握しておかなければならない。したがって、われわれはまずこの把握の作業を行い、その後議論 R の論理的な構造について考察することにしよう。

「第1の鳥小屋の議論」は、その名前からすれば、第五議論の途中から始まる議論であると思われるかもしれない⁽⁶⁰⁾。しかし、周知のように、この議論の争点が第五議論のはじめに述べられる「5+7=11と思う」という計算間違いから生じる偽なる思い、つまり、「12と11の思い違い」という偽なる思いであること (cf.195e8-196b7)、そしてこの偽なる思いに対する反論者の反論によってアポリアに陥り (cf.196b8-d2)、そこから脱するべく「鳥小屋の比喩」が提出されて、この偽なる思いが「12の知と11の知の間の取り違え」として説明されること (cf.199a4-d6)、これらの点より、「第1の鳥小屋の議論」は第五議論のはじめから始まる議論であると理解する方が妥当である⁽⁶¹⁾。すると、この議論は、第一節で再構成された部分も含めて、全体として次の五つの部分からなっているのと解することができる。

I 争点の定立

- II 反論者の反論 [1]
- III 説明者の説明 [1]
- IV 反論者の反論 [2]
- V 説明者の説明 [2]

ここで、これらの五部分について、具体的にその内容を説明すれば、まず、Iの「争点の定立」とは、いま述べたように、「 $5 + 7 = 11$ と思う」との計算間違いから生じる「12と11の思い違い」というaの偽なる思いを議論のはじめに定立することである (cf.1964-7)⁽⁶²⁾。次に、IIの「反論者の反論 [1]」とは、この争点の定立を受けて、反論者が、「12と11の思い違い」という、このaの偽なる思いを第一議論の(C)、すなわち、「知と不知に関する矛盾律としての公理」⁽⁶³⁾によって不可能であると否定し、よって、「偽なる思いはない」と反論することである (cf.1968-93)。さらにIIIの「説明者の説明 [1]」とは、この反論者の反論に対して、説明者が「鳥小屋の比喩」に基づいて第一の鳥小屋を措定し、その中に「すべての自然数」の知を導入して、「12と11の思い違い」というaの偽なる思いをこの鳥小屋の中の「12の知と11の知の間の取り違え」として説明することである (cf.1994-96)。第一節で挙げられた再構成の七命題の中、(ア)(イ)の二命題がこの部分に当たるとは明らかである。そしてIVの「反論者の反論 [2]」とは、これに対して、反論者が、この説明者の説明によれば、aは「すべての数の知がころの中にありながら、ころろはひとつの数も知ることがなく、すべての数について無知であるという、まったくもって不合理なことになってしまふ」(cf.1993-5)と反論することである。この部分には、その内容はともかく、再構成の七命題の中の(ウ)が該当する。そして最後に、Vの「説明者の説明 [2]」とは、この反論者の反論に対して、説明者が鳥小屋の中に「知」とともに「不知」を導入する「妙案」を提示し、「12と11の思い違い」というa

の偽なる思いをこの鳥小屋の中の「12の知と11の不知の間の取り違え」として説明することである (cf.199e1-6)。この部分には、七命題の中では、(エ) が明らかに該当する⁽⁶⁴⁾。

以上が「第1の鳥小屋の議論」を構成する五部分の具体的な内容の説明である。この説明は同時にこの議論の論理的な構造を、その弁証問答の議論構造とともに説明するものであるが、第一節で挙げられた七命題の中、(ア) (イ) (ウ) (エ) の四命題にはそれぞれ該当する部分があるが、(オ) (カ) (キ) の三命題には該当する部分がない。これは、氏の説明に問題があるからではなく、昨年の拙論における第五議論の分類の仕方と本論文におけるそれとが異なっており、氏の説明が前者の方によっているからである。しかし、後者の方によるならば、「第1の鳥小屋の議論」は第五議論の「終盤の部分」(199c7-200c7) の「前半」(199c7-200a10) の末尾、すなわち、200a10で終るのではなく、上で説明したように、その途中の199e6で終るのであり、こうして(オ) (カ) (キ) の三命題には該当する部分がないのである。これらは「第1の鳥小屋の議論」に続く次の議論、つまり、議論Rの中に該当する部分をもつことになる。

さて、議論Rの範型である「第1の鳥小屋の議論」の論理的な構造が説明され、その把握の作業が行われたので、われわれは次に議論Rの論理的な構造について、先に述べた二つの方法論的な指針を念頭に置きながら、考察することにしよう。

まず、議論Rの第一段階であるが⁽⁶⁵⁾、「第1の鳥小屋の議論」がその範型であることから、それは全体として以下の五つの部分からなっているものと見ることができる。

I₁ 争点の定立

II₁ 反論者の反論 [1]

- III₁ 説明者の説明 [1]
- IV₁ 反論者の反論 [2]
- V₁ 説明者の説明 [2]

これらの五つの部分について、その具体的な内容を述べれば、はじめにI₁の「争点の定立」とは、自らの計算間違いには気づかないaは自らの偽なる思いについての2階の偽なる思いをもっており、第一の鳥小屋の中のIIの不知を捕らえているにもかかわらず、自分はIIの知を捕らえていると思っていることより、議論の進行役が「IIの知とIIの不知の思い違い」という、このaの偽なる思いを議論の最初に定立することである (cf.199e7-200a10)。この部分には、先の七命題の中の(オ)(カ)(キ)という、残りの三命題が該当する。次に、II₁の「反論者の反論[1]」とは、この争点の定立を受けて、反論者がこの「IIの知とIIの不知の思い違い」というaの偽なる思いを第一議論と同様な仕方で否定し、反論することである。つまり、この思いの中の「IIの知」と「IIの不知」の二項に第一議論の(A)、すなわち、「知と不知に関する排中律としての公理」⁽⁶⁶⁾を適用して得られる四通りの思いの可能性をすべて否定することによって、この思いを否定し、反論することである (cf.200a11-b5)。この部分は昨年の拙論や本論文の第一節で「議論Rの第一段階」と言われたものであるが⁽⁶⁷⁾、ここでは、第一段階の一部として位置づけられる。さらにIII₁の「説明者の説明[1]」とは、この反論者の反論に対して、説明者が第二の鳥小屋を措定し、その中に「IIの知の知」や「IIの不知の知」等の2階の知を導入して、「IIの知とIIの不知の思い違い」というaの偽なる思いを第二の鳥小屋の中の「IIの知の知とIIの不知の知の間の取り違い」として説明することである (cf.200b5-c1)。この部分は昨年の拙論や本論文の第一節で「議論Rの第二段階」と言われたものに属しており、この段階の再構成に登場した七命題の中では(A)(イ)の二命題がこれに当たる⁽⁶⁸⁾。そしてIV₁の「反論者の反論

「2」とは、これに対して、反論者が、この説明者の説明によれば、aは「すべての数の知の知や不知の知がこころの中にありながら、こころはひとつの数の知や不知も知ることがなく、すべての数の知や不知について無知であるという、まったくもって不合理なことになってしまふ」(cf.200b¹⁻²)と反論することである。この部分には、その内容はともあれ、七命題の中の(ウ)、ただし、第二節で修正された(ウ)が該当する。そして最後に、V₁の「説明者の説明「2」」とは、この反論者の反論に対して、説明者が第二の鳥小屋の中に「11の知の知」や「11の不知の知」等とともに、「11の知の不知」等の2階の不知を導入する「妙案」を提示し、「11の知と11の不知の思い違い」というaの偽なる思いを第二の鳥小屋の中の「11の知の不知と11の不知の知の間の取り違え」として説明することである。この部分には、七命題の中では、第二節で修正された(エ)が該当する。

以上が議論Rの第一段階を構成する五部分の具体的な内容の説明である。この説明はまた議論Rの第一段階の論理的な構造を、その弁証問答の論理構造とともに説明するものである。そして第一節と第二節で挙げられた再構成の諸命題の中、(オ)(カ)(キ)の三命題と(ア)(イ)(ウ)(エ)の四命題の都合七命題が五部分の中のIIを除いた四部分に該当する。これは、議論Rの第一段階を五部分による構成とするか、もしくは四部分の七命題による構成とするかの違いを表わしているが、争点の定立を受けて、まず問答を始めるのが、事の本質から言っても、反論者であるのが自然であることから、前者を採るのが道理というものであろう⁽⁹⁾。弁証問答の議論構造の対称性という点から言っても、これは首肯けるものである。

次に、議論Rの第二段階は、第一段階と「パラレル」に、I₂の「争点の定立」からV₂の「説明者の説明「2」」までの五つの部分からなっており、その論理的な構造は、これもまた第一段階のそれと「パラレル」に、これら五部分の具体的な内容を通して説明されるものである。そして第一節に登場した再構成の諸命題の中、(オ)(カ)(キ)の三命題と(ア)(イ)の二命題⁽¹⁰⁾、さらには(ウ)(エ)として登場すべき二命題⁽¹¹⁾の都合七命題がこれら五部分

の中のⅡ₂を除いた四部分に該当する。これらの点は議論Rの第三段階以降においても同様である。一般に、議論Rの第n段階はI_nの「争点の定立」からV_nの「説明者の説明」[2]までの五つの部分からなっており、その論理的な構造はこれら五部分の具体的な内容を通して説明されるものである。そして第一・二節に登場した再構成の諸命題と「パラレル」な諸命題の中、(オ)(カ)(キ) (ヤ)(ユ) (ヨ) (エ) (ケ) (コ) (ク) (ケ) の四命題の都合七命題がこれら五部分の中のⅡ₂を除いた四部分に該当する。またこの議論Rの第n段階は、第一節で述べられた議論Rの段階で言えば、その「第n+1段階」に当たるものである。この後者の段階は(カ)(キ) (ヤ)(ユ) (ヨ) (エ) (ケ) (コ) (ク) (ケ)の四命題によって再構成されるが(22)、これより明らかのように、前者の段階に関わる(カ)(キ) (ヤ)(ユ) (ヨ) (エ) (ケ) (コ) (ク) (ケ)の後者の段階では(カ)(キ) (ヤ)(ユ)の二命題として記されており、両者の間に表記上の異なることに注意しなければならぬ(23)。そして(カ)(キ) (ヤ)(ユ) (ヨ) (エ) (ケ) (コ) (ク) (ケ)の四命題は五部分の中のⅡ₂とⅣ_nを除いた三部分、つまり、I_nⅢ_nⅤ_nの三部分に該当ないし関係する。以上が議論Rの論理的な構造についての考察である。

われわれはこれまで本節において、まず議論Rの範型である「第1の鳥小屋の議論」の論理的な構造を、その弁証問答の議論構造とともに把握し、次に、それに基づいて、議論Rの論理的な構造について考察し、それがいかなるものであるかを明らかにしてきた。われわれの分類にしたがえば、『テアイテトス』第二部の第五議論は「第1の鳥小屋の議論」と議論Rとの二つから構成されており、よって、以上より、われわれは、はじめに述べたように、第五議論全体の論理的な構造について考察して、それがいかなるものであるかということ明らかにしたことになる。

注

(1) 今井知正『「テアイテトス」』第二部第五議論の帰趨』『哲学・科学史論叢』第八号(東京大学教養学部哲学・科学史部会)

- 二〇〇六年、1頁22頁。なお、以下で「拙論」と言うときには、この論文を指す。
- (2) 第九回「ギリシャ哲学セミナー」は一昨年の九月十日・十一日の両日に東洋大学（東京都文京区白山）において開催された。なお、昨年の拙論にさらに若干の修正を加え、それに「後記」の文章を補足したものがこの学会のホームページ (<http://www.soc.nic.jp/gps/index.html>) 上に左記の形で公表されている。
- 今井知正『プラトン』『テアイテトス』第二部第五議論の帰趨『ギリシャ哲学セミナー論集』第三巻「プラトンの『テアイテトス』」（ギリシャ哲学セミナー編）二〇〇六年、48頁-63頁。
- (3) 知識の「何であるか」を主題とする対話篇『テアイテトス』では、知識の三つの定義が挙げられて、議論が展開される。二番目に挙げられる「第二定義」は「知識とは真なる思いである」(187b5-c6) というものである。なお、『テアイテトス』の頁数を引用する際には書名を省略し、該当する頁数のみを記す。
- (4) 議論 R は、たとえば、昨年の拙論では、第五議論の「終盤の部分」(199c7-200c7) の「後半」(200a11-c7) に現われ、200a11 から始まると捉えられている（拙論13頁を参照）。だが、第三節で述べるように、議論 R の各段階はその段階に固有な「争点」である「偽なる思い」の定立から始まると考えるべきだとすれば、それは「終盤の部分」の「後半」ではなく、「前半」(199c7-200a10) の途中、すなわち、テアイテトスの「妙案」(196a1-b) の提示の後、つまり、199c7 から始まると捉えられるべきである。そこで、本論文では、第二節までは、議論 R は、従来通り、200a11 から始まると捉えられて、論じられていることを了解されたい。
- (5) 野村義義氏の論文「偽なる思いと高階の鳥小屋」は A4 判11頁のもので、現在のところ、未公開である。
- (6) 第五議論では、われわれのこころを鳥小屋に見立てる「鳥小屋の比喩」が提出され、「知っている」ことの「何であるか」がこの比喩を用いて、説明される (cf.197c1-e7)。
- (7) 野村論文1頁。なお、引用文中の「帰趨」論文」とは一昨年の「ギリシャ哲学セミナー」で発表した拙稿（『テアイテトス』第二部第五議論の帰趨）を指す。また「」内は、必要に応じて、わたくしの加えた補綴である。
- (8) 野村論文1頁、注3。なお、引用文中にある「帰趨」論文、p. 8. 24-25」については、拙論16頁9行目-10行目を参照。
- (9) 先に引用した「アプストラクト」においては、この「11と12の思い違い」という偽なる思いは、この中の「11」と「12」が交換されて、「12と11の思い違い」として言及されていた。これは、プラトン自身が「12 || 11と思う」と「11 || 12と思う」とを同一の偽なる思いとして扱っていることに対応したものであると解される。

(10) 野村論文2頁。

(11) 同上。

(12) 同上。

(13) 同上。なお、命題(ウ)の中の「11の知」という表現には、注の「5」が付けられており、*'tei heautou epistēmēi'* (19942)の解釈について、「a(5)自身の知によって」ではなく……「そのこと(11)自体の知によって」と読むのがよいと考える」(同上、注5)と記されている。わたくしも、次の二つの理由からこの解釈に賛成である。すなわち、一つの理由は、この文脈においては、「他の誰かの知によって」ではなく、まさに「a自身の知によって」というように、「a自身」にとくに言及することの意味がそもそも不明であるからである。なぜなら、ここでは、あるひとaとそのひとの知しかはじめから問題になっていないからである。またもう一つの理由は、もしも再帰代名詞を用いて、aの「彼自身の知によって」に類した表現を使いたいのであれば、*'tei heautou epistēmēi'*ではなく、*'tei en heautōi epistēmēi'* (cf.199b5; 198b10, 199e3, 200c2)「すなわち、「彼自身の内にある知によって」という表現が使われたであろうと思われるからである。

(14) 「思い違い」という偽なる思いを「知と知の間の取り違い」として説明するという、この説明に対する反論者の反論は、テキストの上では、199d1-8の箇所に見られるが、これは内容的には、次の三つの部分に分けることができる。すなわち、一つは「まず第一に」と言われるはじめの部分(199d1-6)であり、(ウ)の反論のなされる部分である。その内容は、よって(ウ)の述べるところである。また一つは「それから次に」と言われる部分(199d7-8)であり、その内容は、aの「11と12の思い違い」を例にとれば、「aは、11が12であり、また12が11であると思うことになってしま」(cf.199e3)というものである。そしてもう一つはこの両者を総括して、言われる部分(199e3-8)であり、その内容は、「知がところの中にあるがら、ここは何ひとつ知ることがなく、すべてについて無知であるという、まったくもって不合理なことになってしま」(cf.199e9)というものである。ここで問題になることは、最初の二つの部分で言われている内容と最後の部分で言われている内容との間には飛躍があり、なぜ、前者の内容から後者の内容が総括されて、導かれるのが理解できないということであろう。というのも、前者の内容からは、たとえば、aは、11の知も12の知もともに鳥小屋の中にありながら、11も12も知ることがなく、両方について無知であるということは言えるとしても(cf.199e3-5)、これを一般化して、後者のように主張することはできないと考えられるからである。恐らく、野村氏もこのような考えから、反論者の反論を後者の内容としてではなく、前者の内容として、それもあからさまな矛盾が現われるはじめの部分の(ウ)としてのみ定式化したものと思わ

れる。しかし、このように考えることはやはり適切ではないように思われる。というのは、1982年の全体は1987年から始まる反論者の文脈に属する行文であり、したがって、「それから次に」で始まる二番目の部分に現われる a の思いを述べた文、たとえば、「a は、11 が 12 であり、また 12 が 11 であると思う」という文は帰属文としてではなく、a の思いの純粋な報告文として反論者によって解釈されるものである。すると、これは、第三議論によれば、a が夢を見ているとしても (cf.1905b)、また気が狂っているとしても (cf.1901c)、決して a について真となることのない不合理きわまる文であり、よって、もしも a がこの文の言うように実際に思うとすれば (cf.1902c-3)、そのとき、a はそもそも数の概念も、数についての言語了解も、なにも働かせてはいないのだということになるであろう。そして、このとき、a は「すべての数の知がころの中にある」から、ころはひとつの数も知ることがなく、すべての数について無知である」ということになり、こうして最後の部分で言われている内容が帰結として導かれることになるからである。よって、もしもこのように考えることができるならば、最初の二つの部分で言われている内容から最後の部分で言われている内容が総括されて、導かれることが理解可能であるということになる。そしてこのことが理解可能であるとすると、以下の二つのことがその帰結として言えるように思われる。すなわち、一つは、もしも (ウ) が反論者の反論の内容を表わすものであるとすれば、それは、はじめの部分の主張する個別的な内容ではなく、最後の部分の主張する全体的な内容であるべきだということである。もう一つは、この反論を回避するために、すぐに続いて言われるテイテトスの「妙案」(1981c) は、はじめの部分の主張する不合理というよりも、最後の部分の主張する不合理を回避し、それに応えるためのものだと思したときにはじめて、いっそう自然で、現実味を帯びた提案として理解されるだろうということである。

(15) ここで、「説明者は」と記したが、テキストの上では、前注にもあるように、勿論、「テイテトスは」である。このように言い換えることができるのは、テイテトスが、説明者と同じく、われわれの常識に従い、「偽なる思いはある」と考えているからである。

(16) 同上。なお、(エ) は「アストラクト」の第四文の中でほぼこのままの形で述べられていたものである。

(17) 同論文 2 頁。

(18) 同論文 3 頁。なお、(カ) の中に記されているギリシア語 *oútesetai* は 2008g に登場する語であるので、削除するか、または *hégēsetai* に書き換えるかすべきである。

(19) 同論文 4 頁。なお、(キ) は「11」が削除された形で定式化されている。これを、(ア)―(エ)と同様に、「11」を補った形

で記すならば、それは以下のようなになる。

(キ) a は11の知を捕らえている (tēthēnēkōs echein) と思っていることとなる (oīsetai)。(しかし実際には、a は11の不知を捕らえている。)

(20) 議論Rが第五議論の「終盤の部分」のどこから始まると捉えられるべきかという点については、後述する第三節と前述の注4とを参照されたい。

(21) (キ)におけるこの「知と不知の思い違い」とは、「11」を補った形で記すならば、「11の知と11の不知の思い違い」(Ba(11a||11a))というものである。

(22) 同上。

(23) 同上。

(24) 「ア」から「キ」までの七命題」といったが、以下に見るように、前述の(オ)に対応する(オ)はなく、(オ)が第二段階でも引き続き用いられていることをお断りしておく。

(25) 同論文5頁。なお、(ア)の文中の「説明しようとして」の箇所注の「12」が付けられており、aの「知と不知の思い違い」(Ba(a||a))を「11の知と11の不知の思い違い」(Ba(11a||11a))として定式化していることについて、「Ba(a||a)」のほうがテキストどおりだと思うが、「帰趨」論文が厳密に(もしくは具体例として)「11」を「補っているのでそれに従った」(同上、注12)と記されている。

(26) 同上。なお、(イ)は「アブストラクト」の第二文の中で、「11」を削除しつつ、ほぼこのままの形で述べられていたものである。

(27) 同上。

(28) 同論文6頁。

(29) 注14の終りに述べたように、(ウ)の内容は1961年の部分の主張する個別的なものではなく、1966年の部分の主張する全体的なものであるべきだとするならば、このことは(ウ)の内容についても同じく言えることであろう。したがって、(ウ)は、「aは、すべての数の「知の知」や「不知の知」がころの中にあるながら、ころはひとつの数の「知」や「不知」も知ることがなく、すべての数の「知」や「不知」について無知であるということになってしまふ」というものにすべきである。

- (30) 同上。なお、(エ)は「アブストラクト」の第五文の中で、「11」を削除しつつ、ほぼこのままの形で述べられているものである。
- (31) 同上。
- (32) 同上。なお、野村論文6頁の注15には、(キ)が「11」を補った形で記されているので、それを以下に記しておく。
(キ) aは、自分が11の知の知を捕らえていると思っっている。しかし、実際には、aは11の知の不知を捕らえている。
- (33) 氏の論文には、「議論Rの第三段階」という表現はないが、この段階は「第3の鳥小屋が指定される」(同論文7頁)段階であるので、このように呼ぶことに問題はないと思われる。これは同時に、議論Rの第一段階に相当する反論者の反論はもはや現われることがなく、議論Rの第二段階以降においては、説明者が第二・第三等々の鳥小屋を指定することから議論が始まるものと解釈されていることを意味する。
- (34) 同論文7頁。なお、この引用符内の句は「11」が削除された形で記されている。これを「11」を補った形で記すならば、「11の知の知」と「11の知の不知」の思い違(Ba(Iiaa || Iiee))を説明するために」となる。
- (35) 同上。なお、(ア)は「11」が削除された形で定式化されている。これを、(ア)と「パラレル」に、「11」を補った形で記すならば、それは以下の通りである。
(ア) 説明者は Ba(Iiaa || Iiee) を説明しようとして、第3の鳥小屋に「11の知の不知 (Iiaa)」と「11の知の知の知 (Iiee)」等の3階の知を導入する。
「11」を補った形で記すならば、それは以下の通りである。
(イ) aは11の知の知の知を捕らえるところを、誤って11の知の不知の知を捕らえてしまっている。
- (36) 同上。なお、(イ)は、前の(ア)と同じく、「11」が削除された形で定式化されている。これを、(イ)と「パラレル」に、
- (37) 同上。
- (38) 同上。
- (39) 同上。なお、「(イイイ)」等は高階微分同様、「ダッシュ、プライム (´) 」が n-1 階連なることを表わす(同上、注16)。
また (イイイ) が a の n 階の偽なる思いの定式化であるとすれば、n 階の偽なる思いは議論Rの第 n-1 段階の再構成において挙げられる命題であるから、それは正しくは (イイイ) ではなく、(イイイ) と記されるべきではないかと思われるかもしれない。いままでの再構成のやり方に従うならば、その通りである。だが、それを (イイイ) と記すことはいままでのや

り方には従わず、それを議論Rの第n段階の再構成の中に、しかもこれがそうであるように、その最初に現われるべき命題として捉えることを意味している。氏の示したこの再構成のやり方の変化は議論Rの各段階の構造をどのように捉えるべきかという問題に直結する論点の一つである。

(40) 同上。なお、(ヤ₁)の中の「知の……の知の知(a₁・a₂)」はn-1箇の知とaとからなり、また「知の……の知の不知(a₁・a₂)」はn-2箇の知とaとその次の1箇の不知とaとからなる(同上、注17を参照)。また(ヤ₂)は「11」が削除された形で定式化されている。これを「11」を補った形で記すならば、それは以下のようなになる。

(ヤ₁) aは、自分が「11の知の……の知の知(11・a₁・a₂)」を捕らえていると思っている。しかし、実際にはaは「11の知の……の知の不知(11・a₁・a₂)」を捕らえている。

(41) 同上。なお、(ク)は、原文では「知の……の知の知」等の表現が削除された形で記されている。そこで、引用の際には、それらを補った形に修正した。そして(ク)の中の「知の……の知の知(a₁・a₂・a₃)」はn箇の知とaとからなり、また「知の……の知の不知の知(a₁・a₂・a₃)」はn-2箇の知とaとその次の1箇の不知とa、さらにそのまた次の1箇の知とaとからなる(同上、注17を参照)。また、(ク)は「11」が削除された形で定式化されている。これを「11」を補った形で記すならば、それは以下の通りである。

(ク) 説明者はaの「11の知の……の知の知(11・a₁・a₂)」と「11の知の……の知の不知(11・a₁・a₂)」の思い違え」を「11の知の……の知の知の知(11・a₁・a₂)」と「11の知の……の知の不知の知(11・a₁・a₂)」の間の取り違え」によって説明する。

(42) 同論文8頁。なお、(ケ)は、前の(ク)と同様、原文では「知の……の知の知」等の表現が削除された形で記されている。そこで、引用の際には、それらを補った形に修正した。そして(ケ)の中の「知の……の知の不知(a₁・a₂)」はn-2箇の知とaと2箇の不知とaとからなる。また(ケ)は「11」が削除された形で定式化されている。これを「11」を補った形で記すならば、それは以下の通りである。

(ケ) 説明者はaの「11の知の……の知の知(11・a₁・a₂)」と「11の知の……の知の不知(11・a₁・a₂)」の思い違え」を「11の知の……の知の知の知(11・a₁・a₂)」と「11の知の……の知の不知の不知(11・a₁・a₂)」の間の取り違え」によって説明する。

(43) 同上。

- (44) 同上。
- (45) 同上。
- (46) 同論文1頁。
- (47) 同論文2頁。
- (48) ここで「二つの要素」といったものの中の最初のものは、勿論、前節の冒頭で述べた「氏の説明の要点」の中ですでに言及され、そこに含まれていたものである。
- (49) (キ) については、前節の論述と本論文の注19を参照。
- (50) ここで、aは「11の不知を捕らえているにもかかわらず」と記したが、事柄の本質からいえば、aは説明者によって「11の不知を捕らえさせられているにもかかわらず」と記すべきところである。
- (51) (ウ)をこのように再定式化することは、無論、この再定式化が(ウ)の内容を表わすものとして、それ自体で「正しい」と認めることではない。(ウ)の内容については、本論文の注14および注29を参照されたい。
- (52) なお、(ケ)の中の「知の……の知の不知($\text{e}:\text{e}\text{e}\text{e}$)」はn-2箇の知とeとその次の1箇の不知とa、さらにそのまた次の1箇の知とeとからなる。また(ケ)は「11」が削除された形で定式化されている。これを「11」を補った形で記すならば、それは以下の通りである。
- (ケ) 説明者はaの「11の知の……の知の不知($\text{11e}:\text{e}\text{e}$)」と「11の知の……の知の不知($\text{11e}:\text{e}\text{e}$)」の思い違いを「11の知の……の知の不知($\text{11e}:\text{e}\text{e}\text{a}$)」と「11の知の……の知の不知($\text{11e}:\text{e}\text{e}\text{a}$)」の間の取り違え」によって説明する。
- (53) 実際、(ク)において考えられている説明者の説明は(イ)に対応するものである。なぜなら、(ク)と(ケ)の間の関係が、たとえば、(イ)と(エ)の間の関係と同じものだと考えられているからである。この点については、野村論文8頁1行目-2行目を参照。
- (54) この点は、たとえば、「第一の鳥小屋の議論」の再構成に登場する(イ)(エ)の二命題と(キ)の間の関係を見れば、明らかである。すなわち、(キ)は(イ)内の表現「誤って」の次に記されている「11の知」と(エ)内の表現「誤って」の次に記されている「11の不知」とから形成されている。そしてこの(キ)より、(ア)で言及される議論Rの第二段階の争点、

つまり、「11の知と11の不知の思い違ふ」(Ba(11a=11e))が定立されるのである。

(55) この(キ)の定式化については、同論文6頁の注15と本論文の注32を参照。

(56) (ア)が(オ)(カ)(キ)の三命題と同じ部類に入れられるのは、それがたんにこれらの三命題と同様、正しく定式化されているからではない。それは、(ア)が「第1の鳥小屋の議論」の再構成に登場する(オ)(カ)(キ)の三命題に基づいて定式化されており、(オ)(カ)(キ)の三命題が(オ)(カ)(キ)の三命題と「パラレル」な性格をもっているからである。

(57) これは、裏返して言えば、七命題が二分されていないければ、(イ)(ウ)(エ)の三命題の定式化の問題、つまり、最初の問題点は起こらなかったであろうということである。

(58) (ヤ^e)は、「11」を補った形で記すならば、以下のように定式化される。

(ヤ^e) aは、自分が「11の知の……の知の知の知(11a:eee)」を捕らえていると思っている。しかし、実際にはaは「11の知の……の知の知の不知(11a:eed)」を捕らえている。

なお、(ヤ^e)の中の「11の知の……の知の知の知(11a:eee)」はn箇の知とeとからなり、また「11の知の……の知の不知(11a:eed)」はn-1箇の知とeとその次の1箇の不知とaとからなる。

(59) この議論構造は、勿論、議論Rを含む第五議論にのみ特有なものではなく、『テアイテトス』の第二部で展開される五議論のすべてに共通なものである。これについては、拙論第一節の論述(3頁-7頁)と第二節の「論点S」(8頁)とを参照されたい。

(60) 「鳥小屋」(penstereon)の語は第五議論の中頃の1973にはじめて現われる。

(61) 第五議論のはじめから後半部(1959-199c)までの議論については、拙論11頁-12頁を参照。なお、以下で述べる「第1の鳥小屋の議論」は第一節において(ア)から(キ)までの七命題によって再構成されたものとは幾つかの点で異なっており、その意味では、たとえば、「新しい」「第1の鳥小屋の議論」と言うべきかもしれない。

(62) ここで、争点を定立するのは誰かという、定立の主体が問題になる。この主体は、無論、説明者でもなければ、反論者でもない。これは、テキストの上では、議論の進行役であるソクラテスであり、ここに、この進行役を説明者とも反論者とも異なる第三の者として立てる必要があることが明らかになる。『テアイテトス』第二部の五議論の中でも、少なくとも第五議論については、その弁証問答の議論構造は説明者と反論者とさらに議論の進行役を加えた三者の立場から分析されなければならないと考えられる。

- (63) これについては、拙論9頁を参照。
- (64) 厳密に言えば、(オ)もこの部分で言われているので (cf.1998-9)、ここに該当すると言うべきかもしれない。しかし、(オ)は次の箇所で言い直され (cf.1998-2001, 5-9) (カ)から(キ)の定式化の導出に用いられているので、(カ)(キ)の二命題と一緒に扱うことにする。
- (65) ここで「議論Rの第一段階」と言ったものは、実は、以下で述べるように、本論文の第一節や拙論の14頁で言っている同名のものとは異なったものである。それをお断りしておく。
- (66) これについては、拙論9頁を参照。
- (67) この点については、本論文の注65を参照。
- (68) ただし、(イ)に関しては、第一節に登場したのではなく、第二節で修正された定式化の方を指す。
- (69) 争点の定立を受けて、まず問答を始めるのが反論者であるということとは、争点を定立する議論の進行役が説明者と反論者の双方に対して完全に中立的な第三者であるわけではないことを示している。議論の進行役は説明者とともに、「偽なる思いはある」という、われわれの常識の立場に立っているからである。
- (70) ただし、(イ)に関しては、第一節に登場したのではなく、「11」を補った形で記すならば、以下のように修正された定式化の方を指す。
- (71) (イ) aは11の知の知を捕らえるところを、誤って11の知の知の知を捕らえてしまっている。
 (ウ)(エ) の二命題は第一節には登場しないが、「11」を補った形で記すならば、正しくは以下のようにそれぞれ定式化される。
- (ウ) aはまさに11の知の知の知によって11の知の知を知らないことになってしまう。
- (エ) aは11の知の知の知を捕らえるところを、誤って11の知の知の知の知を捕らえてしまっている。
- (72) これは、第一節で述べられた議論Rの第n段階が (カ)(キ) (ク)(ケ) の四命題によって再構成されたことに単純に従ったものである。
- (73) この点については、本論文の注39を参照。第一節で述べられた議論Rの第n段階の再構成において、aのn階の偽なる思いが (カ)(キ) (ク)(ケ) としてではなく、(カ)(キ) (ク)(ケ) として定式化されたことを指す。

* 本論文は、本文のはじめに述べたように、野村光義氏の質問と論文に対する応答として書かれたものである。ここに改めて記し、氏の明快な批判と議論に対して心からの謝意を表する。